

日本・地域経営実践人財養成講座

—居合わせた者よ、いきさつの語り部となれ—

平成 25 年 2 月 28 日

目次

- 1 はじめに
- 1 飯田市概要説明
- 2 おひさま進歩エネルギー(株)
の取り組み
- 3 小水力発電機(すいじん 3 号)
の開発について
- 4 りんご並木が語りかけてきたこと
- 5 飯田市の公民館活動について
- 6 地域自治と公民館活動
- 7 飯田市の地域経営から学ぶ
- 8 編集後記
- 9 特別寄稿

はじめに

人財養成塾ゼロ年度の最終講座が、平成 24 年 12 月 15 日(土)～16 日(日)に飯田市の視察として行われました。

1 日目は、まず飯田市の紹介をしていただいた後、続いて特徴ある地元産業界での取り組みについて話して頂きました。

その後は 2 日目にまたがって飯田市の市民活動について、りんご並木活動と公民館活動を主としてお話をして頂きました。

スケジュール

15 日(土)

- 13:30～ りんご並木散策
 14:15～ 飯田市概要説明 飯田市企画課 秦野氏
 14:45～ おひさま進歩エネルギー(株)の取り組み
 蓬田裕一氏
 15:45～ 小水力発電機(すいじん 3 号)の開発について
 南信州・飯田産業センター オーガナイザー
 木村幸治氏
 16:45～ 講演～りんご並木が語りかけてきたこと～
 橋南公民館長 加藤尚弘氏

16 日(日)

- 8:45～ 講演～飯田市の公民館活動について～
 飯田市公民館副館長 木下巨一氏
 9:30～ 講演～地域自治と公民館活動～
 ひさかた風土舎 長谷部三弘氏
 10:45～ 議論～飯田市の地域経営から学ぶ&まとめ～
 岡田先生

飯田市概要説明

飯田市企画課 秦野さん

飯田市は長野県の南部に位置する市で人口約 10 万人。街のシンボルのりんご並木の他、人形劇のまちとしても有名。産業は伝統的なものから精密機械まで多様なものづくりの集積地となっている。市の中心部は天竜川右岸の河岸段丘上にあり、市制施行時はこの地域が飯田市域であった。以来、現在まで 6 回にわたり周辺の町村との合併を行っている。旧市域を特に「丘の上」と呼んでいる。

市街地は戦争で焼けることはなかったが、昭和 22 年の大火で約 80%を焼失してしまった。その復興に、中学生がりんご並木を創り、50 年が過ぎた。市のシンボルとなるだけでなく、市民の誇りのシンボルにもなっている。

6 回にわたる市町村合併の中で、行政の簡素化のために旧役場は残さず公民館も飯田市公民館のもとに置かれる分館にしようという声もあった。しかし、多くの議論の結果、旧役場を支所として残し公民館もそのままの配置にするとした決断が、現在の地域の特性を生かしたまちづくりや公民館における社会教育活動につながっている。

毎年、いいだ人形劇フェスタという国内最大の人形劇の祭典が行われている。1979 年から始まったイベントだが、元々伊那谷には人形浄瑠璃の文化が根付いていたこともある。5 年前には川本喜八郎人形美術館が開館された。これは、飯田市民の「人形が生きているようだ」という感想に感銘を受けた川本氏が、「飯田こそが人形たちにふさわしい地だ」と考えたことによる。

飯田市は、持続可能な地域づくりのために、「環境」「人」「連携・ネットワーク」という 3 つの視点を持っている。「環境」の面では長い日照時間やアルプスに囲まれた地理を活かし、太陽光や小水力の導入を市民・産業界が協働して取り組んでいる。「人」については、飯田市も他の地域と変わらず深刻な人口減少に直面している。地域に大学がほぼ無いこともあり、一旦出て行ってしまうのは仕方がないとしても、帰りたいと思える人づくり、実際に帰ってこられる地域づくりを実行してゆかなくてはならない。「連携・ネットワーク」では南信州で観光公社を立ち上げたり、定住自立圏の構築を掲げたりしている。市の財産・町村の資源を共有し、南信州地域全体での共生を目指してゆく。



概要説明を受ける塾生

おひさま進歩エネルギー(株)の取り組み 蓬田さんの講演

2004 年に飯田市を中心とした南信州地域で地産地消のエネルギーを目指して NPO 法人が設立された。初めは飯田市内の保育園の屋根を借り、寄付によって太陽光パネルを設置した。ただ発電するのみでなく、子供たちの環境意識への働きかけをすることで、家庭や保育園職員の環境意識までも高めることができた。

その後、NPO 事業の理念を核に、北海道での市民による風力発電ファンドの仕組みを参考に、パートナーシップ型の環境公益事業としておひさま進歩エネルギーは設立された。1 つのファンドから省エネルギーと創エネルギーの二つの事業に出資される仕組みで、省エネルギー事業ではエネルギーコスト削減のサービスを提供し、創エネルギー事業では公的施設の屋根を借りて太陽光発電や自然エネルギー導入を行う。創エネルギー事業の後盾として、飯田市との長期契約（公的施設は目的外使用不可、また単年度契約が基本）や買取価格設定（中部電力の料金と同等に設定）といった前例のない行政判断が挙げられる。

3 年前からは地域と協働して取り組む新たな仕組みとして、一般家庭を対象とした「おひさま 0 円システム」を始めた。単に太陽光パネルを分割ローンで売るのではなく、9 年間屋根を借り、おひさま進歩が太陽光発電を行い、家庭を通して電力会社に売電するという考え方である。初期費用は電気料金として回収され、10 年目以降太陽光パネルは家庭に譲渡される。この取り組みは県内の他の地域にも広まってきている。

エネルギーを地産地消し、自分たちの手に取り戻す。お金の流れを変えて社会を変え、コミュニティを自分たちの手でつくることを目指してゆきたい。

小水力発電機(すいじん 3 号)の開発について

南信州・飯田産業センター オーガナイザー 木村さんの講演

地域企業の保有する知能技術などの経営資源を実質的に連携させ、共同受注や新産業分野の開拓、情報の受発信などの支援を目的とした第三セクター「飯田ビジネスネットワークセンター（Network Support Communication の頭を取って NESUC-IIDA）」が平成 9 年に設立された。現在 83 社の企業が会員となっており、展示会への出展や連携製品開発、さらに UI ターン希望者へのマッチングなども行っている。これまでの新製品開発プロジェクトには今回紹介する「すいじん 3 号」以外にも、LED 防犯灯から美顔器、エコバイクなど様々である。

「すいじん 3 号」の開発経緯は、今年 2 月に JST の社会技術研究開発センターから飯田市の企画課へ発電機製造企業紹介依頼があり、工業課を通して NESUC-IIDA への情報提供があった。早速会員企業に対しての説明会が開かれ、数回の打ち合わせ後、3 月にプロジェクトを 5 企業で発足させた。17 回の打ち合わせを重ね、代表幹事企業の変更なども経ながら 5 月末に JST、産業センター、代表企業との間で役割分担に関する覚書を交わすこととなった。その後、6 月に製品発表があったが、問い合わせの内容などから発電機だけでなく水車も含めなければビジネスとしては困難であると判断し、プロペラ効率の評価や拡販活動の一助を目的とした公開実験も行われた。

今後は実証実験の実施や海外を含めた地域内外への販売を行ってゆく予定である。NESUC-IIDA としては、もっと開発・設計的な職場を地域に増やし、飯田から出て勉強している技術者が飯田に帰ってこられる状況を創りたい。

開発・設計的な職場を地域に増やし、飯田から出て勉強している技術者が飯田に帰ってこられる状況を創りたい。

りんご並木が語りかけてきたこと 橋南公民館長 加藤さんの講演

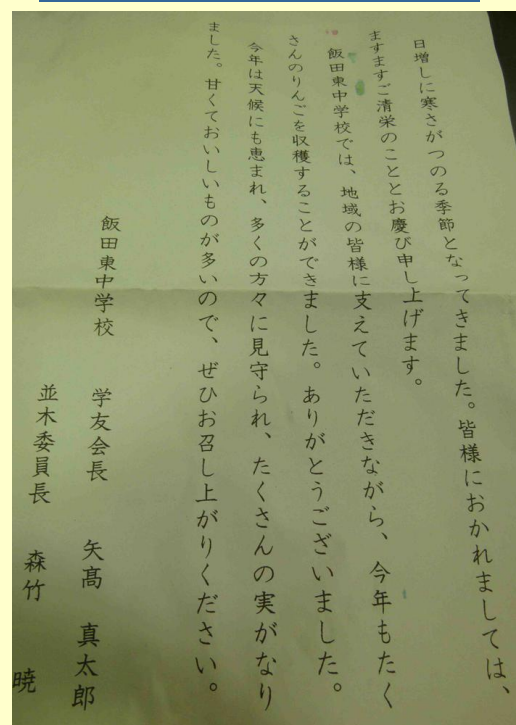
昭和 22 年の大火で市街地の 3 分の 2 を失った飯田市は、復興計画で防火都市を目指すこととし、幅 30m の防火道路建設に着手した。昭和 27 年に東中学校の松島校長から札幌の街路樹やヨーロッパのりんご並木の話聞いた生徒たちは、自分たちの手で美しい街をつくろうと、街路樹としてりんごを植えることとする。当初は強い反対にも遭ったが、生徒たちの熱意は折れず、翌年に植樹されることとなった。焦土にそのまま道路を敷いたので、がれきの掘り出しに大変苦労したほか、生徒の大多数が町中育ちであったため、農作業経験者が少ないこと、道具を集めることにも苦労した。

昭和 39 年にはりんご並木後援会が設立され、生徒の活動を支援しているが、最近では高齢化が進んでおり、サポートが難しくなっている。加えて少子化による生徒数減少で並木維持が非常に困難になってきており、地域全体で維持してゆくことが求められている。また小中連携による一貫教育も重要だと考えている。現在は 6 年生から並木作業に参加しているが、もっと早くから参加しても良いと思っている。小学校の運動会の組体操ナレーションでは「これからのまちづくりは私たちに任せてください。私たちの力を信じてください。」とあり、りんごを植えたときの精神を引き継いでくれていて感動した。

市が合併を繰り返すにつれ、「丘の上」以外からも飯田市の職員が来るようになった。すると、りんご並木について知らない人が増えてきた。そこで、勉強会やテストを行ったりしているが、あまり成績は芳しくない。また高度経済成長期に商店主達は郊外に家を建ててしまった。これも一因となって、彼らから地域を盛り上げてゆこうという気概が感じられにくくなってしまった。

このような状況で、りんご並木のことに興味を持たせることや地域を盛り上げるように働きかけることも大切だと感じているが、少々難しいところがある。高度経済成長を経験している大人たちの中には、先人のおかげで今の生活ができているという認識が薄いからだ。だからこそ、これからは子供たちに期待をしたい。子供たちはとても自発的である。最近ではりんご並木作業の活動を通じて福祉活動や震災の復興支援活動までも行っている。並木作業を通じ、時代のニーズに対応し、自ら考え行動する精神の育成とその成果が実ってきており、将来に対する新たな展開が期待される。

時代の変化と共にりんご並木を取り巻く状況も変化してきているが、自ら考え行動する精神が、「自分たちの手で美しい町をつくろう」という精神がりんご並木を通して受け継がれている。



飯田市の人財塾の会場では、地元の心遣いで貴重な「りんご並木」のりんごのお裾分けにあずかりました。これは、頂いたりんごに添えられていたお手紙です。

飯田市の公民館活動について 飯田市公民館副館長 木下さんの講演

飯田では、『行政は受け手であり、住民が送り手ある。』という関係が成り立っている。その中で公民館は、自分達の生きる「まち」を作り、そこに住む「ひと」を育てる土台になっている。



にこやかに公民館活動を語る木下さん
(写真左手)
塾生のためにりんご並木で獲れたりんごを、手なれた手つきで剥いて下さる佐藤副市長(写真右手)

飯田では、公民館が自分達の生きる「まち」を作り、そこに住む「ひと」を育てる土台になっている。驚くべきことは、その育てられる「ひと」は自治体職員も含まれているという点である。これを可能にしているのが、重要な若手人員を公民館主事に配置するシステムである。日々地域の方々と直接向き合うことのできる環境で働くことにより、職員は自ずと住民の立場に立って行政を考え、その考えによって立って行動することを身に付ける。かつて私も公民館主事をしていたが、地域の方々からは「お前を育てたのはおれたちだ。」とよく言われたが、実際そうだと思う。

公民館の活動としては、「社会教育」という視点が重要視されている。婦人文庫は 1957 年に設立され、今も最盛期のメンバーの手によって担われている。この活動は女性たちの自立に大きく貢献した。また、地域の課題を住民自らが発見し、学習を通して解決を目指す市民セミナーも長年取り組まれている。買い物をすることが困難な方々のために、この活動を通して、トラック配送サービスが実施されるようになった。このサービスは、公民館・商工会議所・行政が連携して動くことにより、実施にこぎつけることが出来た。飯田の公民館では、自分の身近にある問題を自ら見つけ、行政を含む地域の諸団体とのつながりを活かして、問題解決にあたることを基本方針としている。また、その実現に至るまでの過程で、人材が育成されるのである。この例一つ見ても分かるように、飯田には『行政は受け手である。住民が送り手である。』という関係が成り立っている。

以上で述べた活動の立ち上げに尽力していたのが、2 代前の市長の松澤さんである。今の飯田市の公民館活動を語る上で、この方の存在は欠くことができない。松澤さんは、「飯田市役所全体を公民館のようにしたい」と考えたが、現在もその思いは脈々と受け継がれている。

地域自治と公民館活動 ひさかた風土舎 長谷部さんの講演

まちづくりは遊びながら、楽しみながらやるものだ。歯を食いしばってやるものじゃない。ここにはそれを可能にする風土・歴史がある。しかし、その風土が簡単に育まれたわけではない。昭和 39 年に私たちが暮らす上久堅（かみひさかた）は飯田市に吸収合併されて以来、行政依存の体質が地域の中に浸透してしまっていた。平成元年、この体質では地域の活性化はおぼつかない、自立して初めて「地域」となるのだと気づき、「上久堅地域づくり策定委員会」で『鎮守の杜構想』を策定した。地区内の 13 の地区がシンボルとなる花木を選定して植樹し、「たった 1 本の花だけど、そこからまちづくりを始めよう！」と掲げられた。そして、それぞれの集落が自主的実践グループを立ち上げ、確実な実践を行っていた。ここには、具体的な実践から分かることがあり、その実践により地域の教育力を高める狙いがあった。私が暮らす久堅では、柏原農業を考える会が作られ、野菜の産直事業や他県への視察が行われてきた。これらを通して、地域内交流にとどまらず、地域外交流も積極的に行われるようになった。

そして、私は退職後に、仲間たちと共にこの地に『ひさかた風土舎』を立ち上げた。この名前には、何時でも何処でも活動できる『舎』で、『土』＝地域に住む人と『風』＝行政、学者等を結んで、『地域』を作ろうという意志が込められている。遊び心のある異業種仲間の実践集団で、鎮守の杜構想を立て、「十三(とさ)の郷づくり」を具現化する役割を担おうという意図があった(13 の異なる集落ごとの特徴を活かした郷づくりという意味が込められている)。特産品作り・学習文化・交流活動を実践活動の軸に置き、様々な活動をしている。『ひさかたワイン』や清酒『ひさかた』といったオリジナル製品を作って販売をしたり、京都大学の 11 月祭に出店をし、交流をしたりもした。そのときに、少しへこんだりんごは「えくぼりんご」と称して売ったりもした。夏休み期間中には村の寺子屋を開き、子供たちが夏休みの宿題をできる場所を作った。そこには、まず分からなければ友達に聞き、それで分からなければ先輩に聞き、それでも分からなければ師匠と呼ばれる元教師たちが指導をする環境がある。このようにして、子供たちは寺子屋で縦社会も学ぶことができるのである。

私はこれまで遊びながら、楽しみながらまちづくりに取り組んできた。それが出来ているのも先代が地域自治・住民自治をやってきたという風土があり、仲間・上司をはじめとする人間関係に恵まれたおかげだと思っている。地域で、住民自治の風土をきちっと作っていくことが、必ずまちづくり・むらおこしにつながると信じている。

住民自治において、地域(横系)が行政(縦系)をうまく生かすことにより、縦系と横系が編みこまれ、地域という面(メッシュ)ができる。



ひさかた風土舎の活動を語る長谷部さん
(写真上)
長谷部さんのお話を熱心にメモする塾生

◆◇◆ 質疑 ◇◇◆

福島さん

ひさかた風土舎の取り組みを非常におもしろいと感じた。しかし、次の世代にどのように引き継いでいくかが課題になると思う。いかにして、次の世代に引き継ぐかというビジョンを教えてください。

長谷部さん

別にこの世代で風土舎が終わってもいいと思っている。たとえ風土舎が終わっても、子が親の背を見て育つように、風土舎の活動を見てきた次の世代が次の新しいグループを作り出してくれると思う。

岡田先生

配布して頂いた資料の中にある写真の説明をして頂きたい。

長谷部さん

これは農業振興会議で、鹿・猪などの被害から農作物を守るために防御柵を設置した写真で、農業者個別所得補償交付金を活用し、それを個人個人で使わずに、農業振興会議でお金を集めてこの柵を設置した。行政という縦糸に我々がどのように横糸を入れるかが重要で、両者がうまく編みこまれることで、地域という面（メッシュ）ができると考えている。

飯田市の地域経営から学ぶ、まとめ

今回の視察の終わりに岡田先生からのまとめと寺谷さんのコメントを頂きました。その後、参加者の皆さんに視察の感想を述べて頂きました。岡田先生と寺谷さんのコメントに加え、平塚さんと長谷川さんの感想を以下に記載します。

岡田先生

これまで「智頭」モデルを塾の中で学び、「飯田」モデルを今回の視察で学んだことで、社会システムはその地域、風土のもとで成り立つものだということが理解できたはずである。智頭でも同じような地域像は目指されていたが、そこに至るプロセス・結果は全く異なるものとなっている。ところで飯田では、地域と行政が協働できる下地があるが、それにしても簡単には縦糸（行政）と横糸（地域）を紡ぐことは出来ないものである。だからこそ、どのように紡ぐかをガイド出来る人が地域には必要なのである。また、ここでまちづくりの形として、『協奏(争)⇒学び⇒ともに学び⇒遊ぶ』という形があることを学んだ。

寺谷さん

地域はほうっておけば自閉してしまうものである。だからこそ、今こそ地域自治・住民自治が必要とされる。住民自治とはすなわち、自らが動くこと、自らが計画することである。そして、その活動の中で地域の誇り＝宝を見つける、これが重要である。

また、今回私たちは「飯田」モデルを学ぶという目的で視察に来たが、その飯田でも集落ごとに特色があるということを理解していなければならない。長谷部さんの言葉にもある通り、まちづくり・むらづくりはオンリーワンなのである。

平塚さん

飯田市における地域づくりの合言葉—ムトス飯田—で、飯田市の目指す地域づくりがうかがえる。「ムトス」という言葉は、広辞苑の最末尾の言葉「んとす」を引用したもので、「…しようとする」という意味が込められているようだ。ここでは、自分ができることからやってみようという意志、そしてその実践による地域づくりが住民の手で行われていると感じた。

長谷川さん

私たちは忙しさにかまけて考えることをやめてしまっていることに気付いた。飯田では、「学び」を通して人財が育っている。私も「学び」を大切にしていきたいと思う。

編集後記

今年の人財塾の締めとして、新たなモデル「飯田」モデルを学ぶために飯田に赴いた。たくさんの方々の講演を通して、「学び」の風土が飯田のまちづくりの根底にあることを肌で感じることができた。そして、「学び」は個人を育て、そして地域を育てる肥やしとなることを知った。「学び」により人は次の段階へとステップアップできる。また、「学び」により人は日々「変化」し続けることができる。そしてそれは人に主体性を持たせ、新たな「学び」を得る意志が生まれる。

一方、人財塾は私たちにとってどういう場所であったか。そしてこれからどういう場所となっていくのか。特に私たち学生にとって、人財塾は自らが求めれば気付き・学びが得られる場所であった。そして、これからも岡田先生、寺谷さん、平塚さんがおられて、学びの土俵が作られている。このような貴重な「学びの場」をこれからも大切にしていきたい。また、岡田先生がよく「先生徒」という言葉を使っていたが、これからは生徒だけでなく、先生としての役割、気付き・学びのきっかけから主体性・意志を与えられる役割も担えるよう少しずつ心掛けてゆきたい。

(鳥山、古賀)

特別寄稿 本塾ゼロ年度の営みを締めくくるに当たって

改めて振り返る。私たちはこの一年どのような思いを託し、何をつかもうとしてきたのか？

岡田 憲夫

3月11日が近づいている。あの日から丸2年がめぐって来ようとしているのだ。ぼんやりしていずに、本塾を早く立ちあげなければと思い、ささやかでも行動を起こすことを決断したのはほぼ一年目の3月11日。震災から一年が経過しようとするこの頃であった。震災が問い掛ける奥深いメッセージとそれが突き動かす何かをいかに表現すれば良いのであろうか？ それは各自が何かささやかでも出来る「ことを起こす」ことではないか？ ではそれは何を意味するのか？ そう自問した私たちはそれを「地域経営まちづくり」という言葉に託すことにした。

改めてこの一年の私たちの模索の過程を振り返ってみた。すると大自然の問い掛けの声が少しずつ明瞭に聞こえてきた。それを言葉に起こして本塾の締めくくりのメッセージとしたい。

1. 大自然は問い掛けた

君たち一人ひとりが変わるのか？ それとも君たちは変わらずにいて、周りの環境を誰かに変えてもらうことを相変わらず続けるのか？ 後者のやり方だけでは「君たち自身の命に関わる究極的な問題」は解決しない。そのことが分かっているのに続けるのか？

でも良く考えてみよう。何をするにもいろいろなもの(お金、人的資源、物的資源、情報知識など)を賄わなければならない。人口が減っていく流れは止められるのか？ 今のままで経済力が常に拡大していくことを望むことは現実的なことなのか？ もはや人任せだけにはできないであろう。だが自分の懐を痛めてでもそうするのか？ 自ら労力を買って出てもする覚悟はあるのか？ 失敗するリスクを背負ってでもそうする心構えはあるのか？

君たちは変われるのか？

2. 大自然はさらに問い掛けた

君たち一人ひとりは勘違いをしていたのではないか？ 人は人、私は私。大自然の懷に抱かれる温かさを当たり前と心得違いして、ただぬくぬくと自分たちだけのことに専念してきたのではないか？ でも君たち一人ひとりは実は、本当にちっぽけな存在なのだ。大自然の懷に身を任せるとは、もっともっと奥深く、<人智を超えた悲喜こもごもの可能性のルツボ>の中で揉まれながら生きることなのだ。であれば、「人は人、私は私」とは異なる、もう一つの生き方とのバランスをはからなければならない。日々できるところからで良い。君たち同士が大自然から絶えず学び、お互いにつながり、支え合うことで<悲喜こもごもの可能性のルツボ>を協働して生き抜いて行くべき知恵と能力を身に着けるべきではないか？

君たちはそのように変われるのか？

3. そして大自然は曇りかけて問い続けている。

近代化の名の下、大自然の懷で君たちは長い間、都市づくりの専門家集団・組織に任せて、マチを整えてもらってきた。水道、下水道、堤防、道路、鉄道、港湾、工業団地、都市公園などなど、物理的構造物で環境が改造され、君たちはそれに支えられることが当たり前と受け止めてきた。その結果、「マチは当たり前そこにあり続ける(マチは常にマチである)」と錯覚してきたのではないかと。しかしそのマチの多くが大自然の人智を超える営みの前に膝を屈して崩壊した。その結果、津々浦々でマチは存亡の危機に瀕している。

マチを建て直して、まちづくりをするためには、マチは大自然の懷に抱かれているということをまず肝に銘じておこう。マチを改めて築くということは、<人智を超えた悲喜こもごもの可能性のルツボ>の中で揉まれながら生きる場を整え続けることなのだ。そのためには、都市づくりの専門家集団・組織にもっぱら任せただけやり方では太刀打ちはできないであろう。そうだと。もう一つまったく異なるアプローチが必要なのだ。たとえば大災害で君たち一人ひとりが命を失わないようにするためには、大自然の息遣いをたえず察知し、すみやかに自ら命をまもるための術を日頃から身に付けておくべきなのだ。これは、生活環境を物理的に変えるのではなく、君たち一人ひとりがまず何か行動を取り、「ことを起こす」。そのことで少しずつでも君たちの生活環境への適応力が変わることにより、結果としてマチが変わるというアプローチなのだ。これを君たち一人ひとりが住民として力を合わせて「主体的に行うまちづくり」と呼ぶことにしよう。

4. 君たちは既に気づいてくれたであろうか？ ここからは最初に君たちに問うたこと(1.)に話が戻ることになる。冗長だが、もう一度繰り返しておこう。

何をするにもいろいろなもの(お金、人的資源、物的資源、情報知識など)を賄わなければならない。人口が減っていく流れは止められるのか？ 今のままで経済力が常に拡大していくことを望むことは現実的なことなのか？ もはや人任せだけではできない。だが自分の懷を痛めてでもそうするのか？ 自ら労力を買って出てまでする覚悟はあるのか？ 失敗するリスクを背負ってでもそうする心構えはあるのか？

このような資源の制約とリスクを考えて、地域に住まう君たち一人ひとりが力を合わせてやりくりをすることを「地域経営」と称することにしよう。そうであれば君たち一人ひとりが住民として力を合わせて「主体的に行うまちづくり」は、同時に「地域経営」を目指すことでもある。

「地域経営・まちづくり」とはつまるところ君たち一人ひとりが変わるために皆で何か「ことを起こすこと」なのだ。それはささやかで良い。実践できて少しでも変えられることに意味があるからだ。だからマチは君たちの周りにある小さな小さな生活環境であってよい。ご近所の公園、集合住宅の共同管理エリア、大学のキャンパス、使われなくなった小学校などなど。

君たちよ。今のこのときを置いていつ変われるというのだ。変わるのだ。そのためには、お互いに学び、実践し、つながるための実践塾が必要だ。これを共に始め、運動の輪を広げて行く「ことを起こす」。今その元年が始まっている。そう祈る。

塾生の皆さんは大自然のメッセージがどのように聞こえますか？ このこと言葉のキャッチボールの綴り方教室が始められたら嬉しいことです。本塾は皆さんと新たな一めぐりのスタート地点に立っているのです。